

ナイトメア・ビフォア・クリスマス

2004(平成16)年9月14日鑑賞<東宝試写室>

★★★★



監督=ヘンリー・セリック/製作・原案・キャラクター設定=ティム・バートン/音楽=ダニー・エルフマン/声と歌=市村正親/土居裕子(プエナ・ビスタ・インターナショナル(ジャパン) 配給/1993年アメリカ映画/76分)

……『ビッグ・フィッシュ』(03年)ですばらしい感動を与えたティム・バートン監督の原点は、1993年に公開されたこの『ナイトメア・ビフォア・クリスマス』にある。「ハロウィン風クリスマス」を色彩豊かなラブファンタジーとして描いた10年前の映画がデジタル・リマスター版として復活。ジャックの歌と声を担当した市村正親の歌唱力は圧巻で、劇団四季のミュージカルを観ているよう。1時間16分の短編だが、心が洗われることまちがいない……。

ティム・バートン監督とは？

この映画を製作し、原案・キャラクターを設定したのは、ティム・バートン。ティム・バートン監督は、『バットマン』(89年)のヒットによって有名になったとのことだが、私が印象に残ったのは『ビッグ・フィッシュ』(03年)。大人のおとぎ話風の物語の中で、父と息子の愛情をたっぷりと描いたこの映画には大いに涙したものだ。今回観たパンフレットによると、ティム・バートン監督は、もともとディズニー・プロにアニメーターとして参加していた人物で、1982年に自作の詞をもとにして企画をたちあげたのが、『ナイトメア・ビフォア・クリスマス』。そして、これを人形アニメーションとして完成させたのが1993年。

このファンタジーあふれる人形アニメーションの世界が、ティム・バートン監督の原点であったことが、『ビッグ・フィッシュ』(03年)を観てよくわかった。今回この映画の上映は、10年前の映画をデジタル・リマスター版として復活させ

たものだ。

ハロウィンとは？

ハロウィンとは何か？ それを知っている人は少ないだろう。私がハロウィンという言葉の意味をはじめて知ったのは、『イン・アメリカ～三つの小さな願いごと』（03年）を観たとき。ハロウィンとは、万聖節の前夜祭で、秋の収穫を祝い悪霊を追い出す祭り。そしてアメリカでは、カボチャをくり抜き、目・鼻・口をつけた提灯を飾り、夜には怪物などに仮装した子供たちが「Trick or treat（いたずらかお菓子か）」と近所を回りお菓子をもらったりするもの。そして、『イン・アメリカ～三つの小さな願いごと』では、このハロウィンの1日が大きなウエイトをもっており、大きな感動の伏線に……。

この映画では、主人公のジャック・スケリントン（声と歌：市村正親）は、悲鳴と恐怖に包まれたハロウィン・タウンの大スターで、クモの巣のピンストライプの燕尾服に、コウモリのボウタイを着こなす洒落者というキャラクター。ハロウィンは年に1回だけだが、1年がかりで準備した今年のお祭りも、ジャックが主人公となって大成功。しかし、町長以下、浮かれるハロウィン・タウンの人々をよそに、ジャックはなぜか憂鬱。毎年くり返されるハロウィンの準備にジャックは少し嫌気がさしていた……。

クリスマスに憧れたジャックだが……

憂鬱な気持で歩き回っていたジャックが、いつしか迷い込んだのはクリスマス・タウン。ハロウィン・タウンとは対照的な、楽しい音楽と笑いの生活に満ちたまちがそこにあった。そしてその主役は何といってもサンタクロースだ。そこでジャックが考えたこと……。それは、ジャックが「サンディ・クローズ（サンタクロースの聞き違い）」のかわりに、クリスマスを開催するという、とんでもないことだったから、さあ大変！

すばらしい市村正親の歌声！

この映画だけは、日本語吹替版の方が断然ステキ！ なぜなら、あのミュージ

カルスター市村正親の日本語の歌声をたっぷりと聞くことができるから。私は、劇団四季のミュージカルが大好きで、市村正親は何回も観ているが、毎回そのすばらしい歌声には感激させられている。

この映画では、ジャックのセリフは、その多くが難しい「節回し」(?)の入ったミュージカル風で語られ、劇団四季そのもの……? そんな美しい歌声と美しい映像（もっとも、ハロウィン・タウンの化け物たちは多少気味悪いところもあるが……）を観ることができたのは大感激!

フィンケルスタイン博士とサリーも面白いキャラクター

2日前に観た『ヴァン・ヘルシング (VAN HELSING)』(04年)にも登場したフランケンシュタイン博士と、7人の死体を合体してつくられた化け物「フランケンシュタイン」がこの映画にも登場する。

もっともこの映画では、フランケンシュタイン博士ではなくフィンケルスタイン博士だし、フィンケルスタイン博士につくられたつぎはぎ人間は、化け物の「フランケンシュタイン」ではなく、「サリー」(声と歌:土居裕子)というジャックに想いを寄せている可愛い女の子という設定だから、まさにファンタジーの世界。つぎはぎ人間だから、手や足を切りとったり、縫ったりすることが自由にできるのは、便利であるとともに多少不気味だが、最後は当然ハッピーエンド。こういう映画はそれでいいし、そうだからこそ楽しく鑑賞することができるというもの。

日本のアニメとの優劣は?

日本は、宮崎駿監督の『もののけ姫』(97年)をはじめとして、アニメの先進国。先日の第61回ヴェネチア国際映画祭でも、宮崎駿監督の『ハウルの動く城』が技術貢献賞を受賞するなど、日本のアニメは世界の第一級品。

しかし、ティム・バートン監督が1993年に製作したこの『ナイトメア・ビフォア・クリスマス』のアニメの世界に、私は大いに感動。全く感性がちがうものの、ディズニーアニメの楽しさを再認識することができる内容だった。これからは、日本のアニメもせっせと鑑賞しなければ……。 2004(平成16)年9月14日記